様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月３日現在

機関番号：１３１０３
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５００８３２
研究課題名（和文）　ポートフォリオ活用による反省的実践家としての小学校英語教員養成
研究課題名（英文）　Design of a Program of Nurturing Reflectiveness: The Portfolios of Student-Teachers of English at Elementary Schools

研究代表者
北條　礼子（HOJO　REIKO）
上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授
研究者番号：５０１９９４６０

研究成果の概要（和文）：小学校外国語活動が平成 23 年度より高学年において必修化されたが主に学級担任が担当することが求められ、小学校英語を担当できる教員養成が急務である。平成 21、22 年に研究代表者の所属大学附属小学校にて大学院生、大学生が予備実験、本実験に参加した。その結果、小学校英語教育において教師の反省的実践家としての態度養成にポートフォリオ活用の効果があることが明らかになった。また、反省的実践家としての教師の養成過程で作成される小学校英語活動の実践授業プログラムを構築した。

研究成果の概要（英文）： In April of 2011, English activities were introduced to upper grades of all public elementary school in Japan. In the activities, homeroom teachers are supposed to be in charge, though training courses have not been offered to many homeroom teachers.
In order to nurture elementary school teachers who can be responsible for English activities, portfolios are expected to enhance the attitude of reflective teachers of graduate school students and university students who hope to be elementary teachers in future. In fall and winter of 2009 and 2010, about 20 graduate school students and university students participated in the pre-experiment and the main experiment respectively, both of which were conducted at the elementary school attached to the University where the researcher works. The results of the experiment showed that portfolios, particularly conferences, were effective in nurturing the attitude as reflective teachers in English activities. Also, the program utilizing portfolios was developed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	900,000	270,000	1,170,000
２００９年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１０年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：科学教育・教育工学・教育工学(1602)
キーワード：ポートフォリオ、反省的実践家、小学校英語、教員養成

１．研究開始当初の背景

ポートフォリオを教授や評価に役立てようとする動きは、欧米の教育分野では 1980 年代より始まった(余田､2001)。また、アメリカでは教員養成にも多く用いられている(Linn & Gronlund, 2000)が、国内ではその活用例は殆どない状況である。国内ではポートフォリオの活用は総合的な学習の時間における評価ツールとしての活用が多いが、教授ツールとしても有効な手段であることが指摘されている(村川､2001;西岡､2003)。さらに国内でのポートフォリオの言語教育分野での適応例の数は少ないが、教授ツールとしての有効性はいくつか報告されている(峯石､2001；松崎､2004)。筆者はここ数年来科研費を受け、教授ツールとしてのポートフォリオをテーマとした研究を継続してきた(平成１４～16年度科学研究費基盤研究（Ｃ）；平成１７～１８年度科学研究費基盤研究（Ｃ）)が、この２つの研究の結果から、ポートフォリオは、①学習者にとって自分自身の学習の振り返りに有効であること、②言語学習において自律学習への態度養成に効果があることが明らかになり、さらに③ポートフォリオ作成の作成過程で学習者同士の協同学習が自律学習への態度養成に重要な役割を果たすことが明らかになった。ところで、筆者は勤務先の教員養成大学において、大学内の研究プロジェクト(平成 17～18 年度上越教育大学研究プロジェクト)の助成を受け、その代表者として、国際理解教育の視点を取り入れた小学校英語教育の学習プログラムの構築を行った。教員養成という観点から、現職派遣大学院生、大学院生、大学生が上越教育大学附属小学校への出張授業によりものであった。この出張授業の取り組みには、近年教師教育において必要性が指摘されている、反省的実践家の養成(佐藤､1996)の考えを取り入れている。反省的実践家(reflective practitioner)とはSchön(1983)が「反省的実践家－専門家は実践過程でどう思考しているか」で提起した概念であり、佐藤(1996)は「技術的実践志向」から「反省的実践」をモデルとする教師教育が求められなければならないと述べている。筆者が研究テーマとしてきたポートフォリオの作成過程には、様々な内省活動が内在する (Klenowski, 2002)ことから、ポートフォリオは反省的実践家としての教師の養成を具現化するための一つの有力な手立であると確信するからである。また、佐々木(2004)、湯川(2005)によれば、大学生、大学院生によるゲスト・ティーチャー(Guest Teacher: GT)活動を実施した際に、その活動の一環として授業の事前打ち合わせや授業の振り返りが実施され、振り返りの効果が確認されている。この事前打ち合わせや振り返りの実施であるが､GT 活動の活動回数が少ない場合、時間数の少なさを補足する手段として、内省活動を重視するポートフォリオという手法を用いることにより、小学校英語分野での教員養成における反省的実践家への態度養成に大なる効果が期待できることが確認されている(北條・松崎,2006)。なお、本研究におけるポートフォリオ活用の可能性を最大限に活かすため、ポートフォリオ作成に不可欠といわれるガイドライン(guideline)、ゴールカード(goal card)、カンファレンス(conference)の３要素(Linn & Gronlund, 2000)を重要視することとはいうまでもない。平成 20 年～22 年度の基盤研究（Ｃ）においては、大学あるいは大学院の授業の一環としてではなく、授業外の活動として現職派遣大学院生、大学院生、大学生が附属小学校を舞台に授業案を構築

した上で授業を実践していくことになるが、各個人の授業実践の回数の少なさを補足しながら、かつ反省的授業実践家としての態度の養成が可能であるポートフォリオを活用することにより、反省的実践家としての教員養成を目指した。

２．研究の目的

平成21～22年度の移行期間を経て、平成23年度より公立小学校において外国語活動が必修化されることになっている。本研究の第一の目的は、小学校英語教育において教師の反省的実践家としての態度を養成することにポートフォリオ活用の効果があるかどうかを明らかにすることである。本研究の第二の目的は、反省的実践家としての教師の養成過程で作成される小学校英語活動の実践授業プログラムを構築することである。

３．研究の方法

平成 20 年度：

(1) 先行研究をさらに収集し、その結果を集約し、実験協力者となる附属小学校教諭と打ち合わせを行いながら、附属小学校において実施可能な予備実験計画を考案した。(平成 20 年４月～６月)

(2) 実験に必要なアンケートや教材等を作成した。(平成 20 年７月～8 月)

(3) 必要な教材として予定しているのは、以下のとおりである。

① 事前アンケート（状況分析：ポートフォリオ作成時のスキャフォールディング（学習の支援活動の評価）などに関する項目、評価方法に関する意識などを問う項目)。スキャフォールディングについては Slavin(2003)の考えに基づいている。

② ポートフォリオに必要な書式（ガイドライン、ゴールカード、カンファレンス・シート、カンファレンス・リフレクション・シート、学び愛カード、ショーケース・ポートフォリオ用のカバーシートなど）なお、ポートフォリオ関連書式は松崎(2004)が作成したものに準じたものである。

③ 事後アンケート（ポートフォリオを活用した学習への全体的評価、ポートフォリオ作成時のスキャフォールディング（学習の支援活動の評価）などに関する項目、反省的実践家としての意識の変容を問う項目）

④ 授業評価基準票(自己評価票、学級担任等による評価票)

⑤ 実施授業に対する児童の評価票

(4) 海外の小学校英語教育現場の視察を行い、必要な資料を収集した。(平成 20 年 12 月)

(5) 実験に必要な活動について、トライアル版になる予備実験を実施した。
(平成 20 年９月～平成 21 年３月)

平成 21 年度：

(1) 予備実験の結果を分析し、その分析結果に基づいて、実験計画や実験に用いる教材等を検討し必要な修正を加え、本実験の準備をした。なお、実験協力者となる附属小学校教諭と打ち合わせを行いながら、附属小学校において実施可能な最終的な本実験計画を立案した。(平成 21 年４月～６月)

(2) 実験に必要なアンケートの見直しや教材等の作成を行った。(平成 21 年７月～８月)

(3) 平成 19 年度に実施した予備実験結果をまとめ学会、研究会等での口頭発表の準備をした。(平成 21 年７月)

(4) 学会、研究会等で予備実験の研究結果を発表した。(平成 21 年９月)

(5) 本実験を実施した。(平成 21 年９月～平成 22 年３月)

(6) 第二外国語環境における先進的な小学校英語教育を実践している、フィリピンのフィリピン大学附属小学校を訪問し、英語授業参観と小学校英語関連資料を収集した。(平成２１年 12 月)

平成 22 年度：

(1) 本実験データの集計、分析をした。（平成 22 年４月～６月）

(2) 海外の小学校英語教育現場の視察を行い、必要な最新資料を収集する。(平成 22 年 11 月)

(3) １の結果を基に、２で得られた最新の他の研究結果を参考にし、加味した上で、研究結果をまとめた。（平成年７月～８月）

(4) 学会、研究会等で研究結果を発表した。(平成 22 年９月)

(5) 最終報告書を作成する。（平成 23 年５月～６月）

４．研究成果

(1) 平成 20 年度には、まず、小学校英語活動の実践授業プログラム構築の基礎資料となるデータを収集し、検討した。具体的には、初等科教員養成大学において、平成 20 年 7 月に初等科教員養成大学１年生 152 名を対象に、小学校英語教員養成を目指す出張授業に関する希望を調査した。χ^2検定・分散分析の結果、対象者の大学１年生は、小学校英語活動を参観・視聴したことはないが参観希望が強いこと、出張授業に行く前に大学で練習することやこれまでの出張授業を視聴すること、さらに出張授業はティーム・ティーチングの形態で行いたいとの希望が強いことなどが明らかになった。

12 月には外国語としての英語環境(EFL)にある韓国の教員大学附属小学校において先進的な小学校英語授業を参観し、資料を収集した。以上の調査結果を踏まえ、ポートフォリオ関連書式を修正し、筆者が実施している出張授業においてポートフォリオ活用の効果に関する予備実験を行った。参加者は、筆者の所属している大学の学部生、大学院生である。参加者は英語を専門とし、将来小学校教員を目指している者がほとんどの 20 名であった。予備実験の結果、参加者からは出張授業におけるポートフォリオ活用の効果について肯定的な反応が得られた。

(2) 平成 20 年度は、2009 年 12 月に第二外国語としての英語環境(ESL)における先進的な小学校英語教育を実践している、フィリピンのフィリピン大学附属小学校を訪問し、英語授業参観と小学校英語関連資料を収集した。以上の資料を参考にした上で、初等科教員養成大学において、昨年度設計・試行したポートフォリオを活用した反省的実践家としての小学校英語教員養成プログラムを 2009 年 10 月から 2010 年 3 月にかけて、初等科教員養成大学大学生、大学院生計 20 名を対象に試行した。事前、事後アンケートにより参加者の意識の変容を調査し、直接確率計算、分散分析により分析した。その結果、参加者から同プログラムが反省的実践家としての成長に効果があったとの好意的な反応が得られた。なお、カンファレンスの際に、出張授業を担当している学年ごとのグループでまず反省し、その後全体カンファレンスを行う方がより効果的ではないかとの意見が得られた。

(3) 平成 21 年度には、2010 年 11 月には外国語としての英語環境(EFL)にある台湾の嘉義大學附属小学校において先進的な小学校英

語授業を参観し、資料を収集した。以上の資料を参考にした上で、初等科教員養成大学において、前年度設計・試行したポートフォリオを活用した反省的実践家としての小学校英語教員養成プログラムを修正し、2009 年 10 月から 2010 年 3 月にかけて、初等科教員養成大学大学生、大学院生計 20 名を対象に同プログラムを試行した。事前、事後アンケートにより参加者の意識の変容を調査し、直接確率計算、分散分析により分析した。その結果、参加者から同プログラムが反省的実践家としての成長に効果があったとの肯定的な反応が得られた。

(4) 以上の予備実験、本実験をとおして、反省的実践家としての小学校英語教員を養成するためのポートフォリオ書式を作成し、養成プログラムを構築した。なお、ここでのポートフォリオ書式とは、事前、事後アンケート、ガイドライン、ゴールカードの他に、カンファレスではガイドラインの目標に基づいたパワーポイントによる自由形式の発表である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

① 北條礼子、ポートフォリオを活用した反省的実践家としての小学校英語教員養成プログラムの設計と試行、上越教育大学研究紀要、査読有、30 巻、 2011、191-200

② 北條礼子、ポートフォリオを活用した反省的実践家としての小学校英語教員養成プログラムの効果、日本教育工学会第 25 回全国大会講演論文集、査読無、2010、757-758

③ 北條礼子・君佳子、小学校英語活動における文字指導の試み、教育実践研究、査読無、2011、21 集、1-8

④ 北條礼子・松崎邦守、小学校英語教員養成を目指す出張授業への大学生の希望に関する意識調査、上越教育大学研究紀要、査読有、29 巻、2010、231-240

⑤ 北條礼子・松崎邦守、ポートフォリオを活用した反省的実践家としての小学校英語教員養成プログラムの設計と試行、日本教育工学会第 25 回全国大会講演論文集、査読無、2009、841-842

⑥ 北條礼子、小学校英語教員養成を目指す出張授業への大学生の希望に関する意識調査、日本教育工学会第 24 回全国大会講演論文集、査読無、2008、811-812

⑦ 松崎邦守、小学校英語活動実習における GT ポートフォリオの活用と効果の検討、小学校英語教育学会紀要、査読有、2009、9 号、87-94

〔学会発表〕（計４件）

① 北條礼子、ポートフォリオを活用した反省的実践家としての小学校英語教員養成プログラムの効果、日本教育工学会第 26 回全国大会、2010 年 9 月 20 日

② 北條礼子・松崎邦守、ポートフォリオを活用した反省的実践家としての小学校英語教員養成プログラムの設計と試行、日本教育工学会第 25 回全国大会、2009 年 9 月 21 日

③ 松崎邦守・北條礼子、小学校英語活動実習に関するポートフォリオの設計－学部生のゲスト･ティーチャー活動を事例として－、小学校英語教育学会、平成 20 年 7 月 21 日

④ 北條礼子、小学校英語教員養成を目指す出張授業への大学生の希望に関する意識調査、日本教育工学会第 24 回全国大会、平成 20 年 10 月 13 日

６．研究組織

(1)研究代表者

北條　礼子（HOJO　REIKO）

上越教育大学・大学院学校教育研究科・

教授

研究者番号：50199460

(2)研究分担者

(3)連携研究者

松崎　邦守　（MATSUZAKI　KUNIMORI）

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：90584160